

Youth Manna

マルコ1:35

さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。

2022/5/16(月)

エステル9:1-19

ハマンの勅令によれば、第12の月、すなわちアダルの月の13日は誰でもユダヤ人を殺し、その財産を奪って良いこととなっていた。しかし、実際には逆で、ユダヤ人は自分の仲間、財産を守った(1,3,5)。そして、アダルの月の14日は、ユダヤ人にとって喜びと祝宴の日、つまり祝日とし、互いにご馳走を贈り交わす日となった(19)。これは、今も「プリム」と呼ばれ、現代でも年に1度お祝いされているユダヤ人の大切な慣習の一つである。私達は、神様が守ってくれたこと、導いてくださったことをすぐに忘れてしまう。だからこそ、年に一度、月に一度、いや、1日1日、主の誠実さを思い出す必要がある。今日神様はどんなよいことをしてくたさったかな？1日の終わりに、思い出してみよう！

2022/5/17(火)

エステル9:20-32,10章

プリムの祭りは、神様がユダヤ人虐殺の悲しみを大逆転の喜びに変えてくださったことを記念する祭りとして始まった。ユダヤ人たちは毎年この時に断食をして「神様なしには今の自分はない」と告白しながら祭りを祝った。これは代々その子孫にも大切に受け継いでいる。

神様の恵みを思い返すために、記念日をお祝いすることはとても意味がある。あなた自身が個人的に神様の愛やすごさが分かった日を記念日にするのも良い。来月にはペンテコステがあるけど、その日を特別に祝うためにどんなことができるか考えてみよう！

2022/5/18(水)

エズラ1章

エズラ記は、ペルシア帝国時代の出来事である。バビロンを破ったペルシアは寛容な政策をとり、移住させられた人々に母国への帰還と神を拝むことを許した。1~6章で捕囚からの解放とユダへの帰還、神殿再建の妨害と完成が、7章以降はエズラ自身の帰還と、彼が断行した異国人との結婚解消について記されている。

神はペルシアの王キュロスをを用いられた。彼は、主の民にエルサレムへの帰還と神殿建設を命じ、支援を行った。主の民は、金銀を受けて約束の地に戻った。

神は、異教の国の王をも動かし、神の民を救われた。この神の偉大さを覚え、同じ神が今も私たちのうちに働いてくださっていることを感謝しよう！

2022/5/19(木)

エズラ2:1-58

今日の箇所は帰還した者たちの名簿である。

正直読んで意味があるのか？と思ってしまうかも知れないが、「約何人」ではなく、ここまれ細かく記されているのは完全に神様が一人一人を覚えていたということなのだろう。

ルカ12:7、「あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。」

神様は一人一人を忘れることなく覚えていらっしゃるのか、髪の毛の数すら分かる。

全てを支配される神様に今日も感謝して生きよう！そして私たちが覚え祈る必要があることを切に祈ろう！

2022/5/20(金)

エズラ2:59-70

▶帰還した民たちは、エルサレムにある主の宮に着いた(68)。しかし実際には、神殿も土台も壊されていて何もなかったはずである。それでも、出エジプトのときの民たちが、入ったことの無い土地を信仰によって相続地として目指したように、帰還した民たちは、何も無い土地に信仰によって神殿を見たのだろう。

▶70節には「全イスラエル」とある。帰還した人たちは多くが南ユダ王国出身である。しかし、彼らは分裂後のユダではなくイスラエル全体の再興を目指した。それこそが御心だと信じたからだ。

▶彼らは治安が確立されていない、先の見えない先祖の居住地に、信仰をもって住み始めた。私たちも見える状況によらず、信仰によって一歩ずつ進みたい。そんな信仰を求めて祈ろう。

2022/5/21(土)

エズラ3章

約束の地に帰ってきた人々は、元通りの生活がどのような形になっていくか決まる前でも、神様を礼拝するために集まっていたね。

そして、ささげ物が捧げられる中で神殿が必要なこともはっきりしていったんだ。その神殿の土台を見た時、以前の神殿を見たことのある人、ない人で反応が正反対のものになった。前よりも小さいと嘆く声もあれば、神様を礼拝する神殿ができる感謝に溢れて讚美する人もでてきたね。

先にあるものが何か分からない中でも、新しい生活が変わって忙しい時も、神様を礼拝し、神様との関係が一番にすることこそが私たちにとっての基盤になる。

今日私たちが神様との関係を大切にするためにできることは何だろう？考えて実際にやってみよう！

2022/5/22(日)

エズラ4章

神殿建設開始の知らせを聞きつけ、アッシリア王によって滅亡後のイスラエルに移住させられた人たちの子孫である「敵」がにこやかに協力を申し出てきました。彼らは神様にもいけにえを献げてきましたが、神様を信じてはいませんでした。ゼルバベルたちがそれを見抜いて、きっぱりと協力を断ったところ、妨害や脅しを受けて建設計画そのものがつぶれそうになりました。こうして神殿再建工事は約16年もの期間、中止を余儀なくされました。これはゼルバベルの選択が間違っていたのではなく、信仰ゆえの避けて通れない戦いでした。その後、王が変わっても妨害は続きました。敵はアルタクセルクセス王に、ユダヤ人たちの城壁修復の動きは、やがて納税を拒否し、ユーフラテス川の領土を奪おうとする兆候だと書状で訴えてきました。それから嘘に基づいたずさんな調査の結果、エルサレムの城壁修復は中止を命じられ、勢いを得た敵は武力で城壁を破壊し焼きました。しかし、神様の戦いであるならそこには神様からの助けがあります。敵は執拗で侮れませんが、神の民が目留めるべきなのは、敵ではなく、宇宙をも帝国の王をも支配される神様ご自身です。私たちも日常を生きていると信仰を試されることがあります。そんな時であっても神様の助けを祈って待ち望みましょう。